

音高の記号性と『徒然草』第220段の解釈

明土 真也

五行思想を重視していた古代の中国では、音高に意味があり、正確な律には「善導の力」が備わると考えられていた。本論文では、このような性質を「音高の記号性」と呼ぶ。

一方、『徒然草』第220段は、四天王寺鐘の音高に関する随筆であるが、これを五行思想の観点から口訳した例はなかった。ところが、四天王寺を創建した聖徳太子は、五行思想に基づき、冠位十二階を制定し、五行思想に準じて五聲を説いた『管絃音義』は、1185年に四天王寺で著され、その後も四天王寺で書写された。即ち、1185年以降、四天王寺の楽人たちは『管絃音義』を学んでいたと考えるのが妥当であり、それは、四天王寺の楽人が、五行思想を重視していたことを示す。これらに従い、本論では、五行思想の観点から『徒然草』第220段の解釈を行なった。

例えば、^{こうしやう}黄鐘調を「無常の調子」と呼んだ理由は、^{こうしやう}黄鐘が四季を意味するためである。また、^{こうしやう}黄鐘には中央という意味があるため、「^{こうしやう}黄鐘調の最中」という言葉には、五行思想に通じた者同士が理解し合えるユーモアが含まれている。